

2003.9.23.

評伝「知られざるスターリン」と小説「アルハンゲリスキの亡霊」

松崎 昇

最近、スターリンの評伝「知られざるスターリン」(Z・メドヴェージェフ&R・メドヴェージェフ著・新潮社)(注1)を読んで、少し前に読んだ娯楽小説「アルハンゲリスキの亡霊」(ロバート・ハリス著、新潮文庫)(注2)を読み直してみた。何故かといえば、「アルハンゲリスキの亡霊」が、過去の歴史的事実に関しては、事実(ないしは事実とされていること)に出来るだけ忠実にこれと矛盾しないように、小説を書き進めていることが分かっていたので、これまでに公開された広範な資料に基づいて歴史学者であるメドヴェージェフが確定(または推定)した事実と相違があるかどうかを知りたかったからである。

結論からいうと、スターリンの死亡前後の様子と、その背景にある状況に関して、ハリスに記述は、「知られざるスターリン」で明らかにされたスターリンの死亡前後の状況とある点では微妙に、ある点では大きく異なっているということが分かった。その理由について考えてみた。

まず、「アルハンゲリスキの亡霊」のあらすじは、次のようなものである。

・・・・・・・・・・・・・・・・

「アルハンゲリスキの亡霊」の舞台は現代のモスクワ、学会で訪口中の英人歴史学者に対する、かつてベリヤ付きの警備員だった老人の次のような告白から始まる。

ベリヤの邸宅に深夜マレンコフから電話が掛かってくる。1953年3月1日の夜、正確には2日の午前である。ベリヤは大変興奮して、ただちにその警備員に命じてスターリンの別荘、いわゆる「近くの別荘」(クレムリンに近いという意味)に向け車を走らせる。別荘では靴下裸足のマレンコフが待っていた。マレンコフの先導で2人はスターリンの居室に向かう。そこではスターリンが絨毯の上に倒れており、息はしているものの身体は動かせず、意識の有無も判然としなかった。

ベリヤはただちに、スターリンが脳卒中の発作で倒れ意識を回復する見込みがないことを悟る。(注3) マレンコフに対し、スターリンは既に死んだも同然であることを告げ、別荘の警備員詰め所に行って警備員達に、スターリンは泥酔の末熟睡しているに過ぎないとなじむよう指示する。また、朝7時半になったら、政治局員全員に対し、スターリンの健康が憂慮すべき状態なので治療について集団決定する必要があるという名目で招集を掛けることも指示する。

その上でベリヤはスターリンの身体を探って鍵束を手中にすると、クレムリンのスターリン執務室へ急行する。深夜、無人のクレムリンのスターリン執務室で、ベリヤは書類を漁って持ち出す。この書類はその夜のうちにベリヤの邸宅の庭に当該警備員の手で埋められる。

その書類の中に、スターリンが手書きでメモを書き入れていた分厚い黒色の手帳があった。その手帳に記された内容から奇想天外な事実が判明し事態が進んでいくのだが、手帳の内容もさることながら、そのような手帳が今になって日の目を見ることとなったこと自

体に、実は現代のロシアの政情が絡んだ陰謀が秘められていたというのが、おおざっぱな筋書きである。全編を通じて、スターリンという人間の恐ろしさ、奇怪さが随所に実話によって描かれている。

一方「知られざるスターリン」が、歴史的事実として明らかにするスターリン死亡時の状況は次のようなものである。

スターリンは倒れた前日（2月28日）の夜、別荘にベリヤ、マレンコフ、ブルガーニン、フルシチョフを呼んで夜中から朝4時まで夕食会をやっている。（このような夕食会は慣例的に行われていた。）このときは全く元気に見えた。翌3月1日は日曜日であったが、いつも最初の指示がある午前10時になってもスターリンからの内線電話による指示がなく、警備員や家政婦、コック達の心配するうちに夜10時になってしまった。指示がないのにスターリンに近づくことによってその怒りを買うのをおそれていたお付きの人間達も、とうとう郵便を届けるという口実でスターリンの居室を訪れることにした。最初にスターリンの居室に入った警備副隊長ロズガチェフが見たのは、「アルハンゲリスクの亡霊」に描かれたとおりのスターリンの姿であった。ここまでは、「アルハンゲリスクの亡霊」でハリスの描く状況と違いはない。（厳密にいうと、警備員達はスターリンをソファに移し毛布を掛けたといっているのだから、ベリヤ達が見たのは、床に倒れたままのスターリンではないはずであるが。）しかし、その後で若干違いが生じる。

警備隊長スタロースチンによると、まず、真っ先に上司である国家保安相イグナチェフに電話したところ、ベリヤへも電話するようにといわれた。しかし、ベリヤは電話に出なかったのだから、マレンコフに電話した。程なくベリヤから電話があり、「同志スターリンの病気については誰にもしゃべるな。電話もするな。」といわれた。これはロズガチェフが午後10時頃に倒れているスターリンを発見してから1時間以内の出来事である。ところが、マレンコフとベリヤが現れたのは午前3時になってからである。そして、ここは「アルハンゲリスクの亡霊」と「知られざるスターリン」とが微妙に異なっている点で、ロズガチェフの証言だと、マレンコフが先着していたのではなく二人一緒に別荘に着いている。確かにどういう理由かマレンコフは靴を脱いだけど、スターリンは熟睡しているだけだと警備員を怒鳴りつけたのはマレンコフではなくベリヤ自身である。このロズガチェフの証言は、1995年にラジンスキーが記録したものであるから、ハリスは知っていたと考えられる。したがって、ここはハリスがあえて脚色したとしか考えられない。

この後、「アルハンゲリスクの亡霊」と「知られざるスターリン」とはかなり乖離することになる。

マレンコフとベリヤはすぐに帰ってしまった。ここまでは両書に違いはない。ところが、メドヴェージェフによれば、実は、彼等より先に別荘に駆けつけた人間がいたのである。フルシチョフとブルガーニンである。彼等は、ベリヤ達よりずっと早く別荘に到着していたのだが、スターリンの部屋には全く近づかず当直室で警備員と雑談しただけで、1時間半で帰ってしまっている。ベリヤ達とも顔を合わせていない。（注4）これはいささか不可解な行動に見えるが、フルシチョフ自身が「回想」に述べていることである。一方警備員達はフルシチョフらについては何も言及していない。ハリスもこのことについては全

く述べていない。フルシチョフの「回想」がモスクワで発行されたのは、1997年であり、ハリスの「アルハンゲリスクの亡霊」が発行されたのが1998年だから、ハリスが「回想」を読んでいなかったということも考えられる。もっとも、フルシチョフの「回想」は、ベリヤとマレンコフの行動について変更を加えるものではないから、ベリヤが一人で、鍵を奪い、クレムリンに行ったというハリスの大胆な脚色ないし推測はそれで直接否定されるわけではない。

ハリスの描く3月1日から2日にかけての夜の出来事は、ヴォルコゴーフ（注5）の著書に基づいている。1989年発行の著書「勝利と悲劇」でヴォルコゴーフは、「アルハンゲリスクの亡霊」に書かれたとおり、ベリヤが瀕死の指導者を残してクレムリンにすっ飛んでいき、スターリンの個人文書を持ち出したという推測を提起している。（ハリスは公平にも、「アルハンゲリスクの亡霊」の主人公の歴史学者に、元警備員の告白の真偽を確かめるために、モスクワの図書館でヴォルコゴーフの著書のこの部分を閲覧させている。）

しかし、ヴォルコゴーフは、1996年版では、この推測を訂正し、ベリヤが一人でクレムリンに行ってスターリンの金庫から書類を持ち出したのは、3月5日の昼間であるとした。これは、ヴォルコゴーフが、その後「ロシア連邦大統領アルヒーフ」に接して、3月5日夜に予定された党中央委員会総会に、マレンコフ、ベリヤ、フルシチョフの3人に対しスターリンの書類を整理することを委任するという提案がなされた（したがってその前に幹部会のメンバーによって決定されていた）ことを知ったからである。そのような正当化理由を得てから、ベリヤは他の二人を出し抜いてクレムリンに一人で行ったのである。（この3月5日昼というのも、なかなか限界的な時点である。スターリンが別荘で多くの人が見守る中で息を引き取ったのは、3月5日午後9時50分である。午後8時から40分間クレムリンで党中央委員会総会が開かれていたから、ベリヤを含む多くの要人はそこから駆けつけてきたばかりだった。）

これで、ハリスが依拠したヴォルコゴーフ資料自体が変化してしまったことになるが、メドヴェージェフによると、ヴォルコゴーフの改訂版の推測も正しくない。メドヴェージェフのあげる理由は多くあるが、主なものは、別荘やクレムリンの警備の警備は国家保安省が担当しており、国家保安相のイグナチェフはベリヤの部下ではなくスターリンに直結していたこと、クレムリンのスターリン執務室は24時間態勢で秘書が詰めていたこと、そこへの出入はすべて記録に取られており、それによれば、早くても3月9日のスターリンの葬儀が終わるまでは会合が開かれていて無人になったことはない。したがって、ベリヤ一人が勝手に侵入して金庫を開閉するようなことは不可能であったというのである。

メドヴェージェフは、信頼できる人物からのフルシチョフやミコヤンの話の又聞きとして、クレムリンのスターリンの金庫にあった書類は、整理を任された三人組によってその場で（執務室の暖炉で）焼却されたのだという。その時期は葬儀の直後3月10日か11日と推定している。読みもせずに焼却した理由は、スターリンが個人的に収集した文書の内容には、彼等最高幹部に不利なことしか予想できなかったからである。（注6）

ヴォルコゴーフ第1説、同第2説、メドヴェージェフ説のいずれが正しいのかといえ

ば、メドヴェージェフのいうクレムリンの警備体制が事実とすれば、メドヴェージェフ説に軍配をあげたくなる。ヴォルコゴーフ第1説によっている「アルハンゲリスキの亡霊」でもベリヤは深夜無人のクレムリンに入っていくことになっているので、旗色が悪い。

スターリンの個人文書の行方に関しては、メドヴェージェフは別に1章を費やしているが、相当大量にあったと思われる個人文書は今日まで全く発見されていない。別荘にあった文書類に関しては、3月7日に内務省の特別班によって、机、書架、金庫等すべての家具とともにいずこかへ運び出され（これは早くからスターリンの娘スヴェトラナが語っている。）、その行方は杳として知れないのである。メドヴェージェフは、スターリンの個人文書は既にこの世にないものと推定している。もし極秘の形であれ存在しているのであれば、1956年のスターリン批判、1965年のスターリン復権の試みのいずれかで、唱道者に有利に選び取られた形で世に出てきているはずだというのである。

結局、スターリンの黒い手書きの手帳も、同じ運命をたどったのであろうか。

（注1）

「知られざるスターリン」は、反スターリニズムの著作に徹してきたメドヴェージェフ兄弟が、グラスノスチ以来2000年までに公開された様々なアルヒーフ、それを材料に別の人によって書かれたスターリン評伝などを用いて、新たにいろいろな面から光を当ててスターリンという人間を明らかにした書物である。資料から知られる様々な事実、そこから著者が推定する事実が、組み合わされて生涯の異なった時点でのスターリンの人物像が浮き上がってくる。

（注2）

「アルハンゲリスキの亡霊」の作者、ロバート・ハリスは、大変筆力のある作家で、ここに描かれたスターリンの迫力も出色である。また、「暗号機エニグマへの挑戦」という第二次大戦時の英国の暗号解読機関を舞台とした小説も、ほぼ実際にあったことを基盤に、あり得たフィクションを描いており、エンターテインメントとして第1級の作品である。

（注3）

スターリンの死因が、高血圧と動脈硬化による脳卒中であったことは疑いがない。スターリンは死の7、8年前に高血圧の症状を示していた。死の前年にはタバコをやめているが、それは肺気腫が慢性気管支炎による肺の痛みのためであったらしい。タバコをやめたことによって肥満し始めていた。確かな病歴は分かっていない。スターリンを診た医師が1952年に逮捕され、カルテはスターリンの指示で破棄されたからである。病的な猜疑心を抱いていたスターリンは、その後医師に診断させたことがなく、別荘には医師はおるか看護婦さえも常駐させていなかった。

（注4）

メドヴェージェフは、さらにベリヤ、マレンコフ、フルシチョフ、ブルガーニンの行動

についてこう推測している。

彼等はすべて電話連絡を受けた。そして、ただちにベリヤ、マレンコフ、フルシチョフ、ブルガーニンの4人の間に、ある話し合いがあった。その上で、おそらく序列的に最上部にいたベリヤの意志で、最初にスターリンに会うのはベリヤとすることになった。彼等全員、電話をもらった時点でスターリンの発作の性質、そしてそれが意味するものについて十分分かっていて、だから、スターリンの死の前に、というよりスターリンの死が世に知られる前に、スターリン後の権力体制について体勢を固めておきたかった。それが、ベリヤの「スターリンは寝ているだけだ。」「だれにもこのことをいうな。」という発言やフルシチョフ達の不可解な行動となったのである。ただ、ベリヤが何故フルシチョフより遅く、午前3時になるまで別荘に現れなかったかは、よく分からない。

(注5)

ヴォルコゴーフは、陸軍大将であり、かつてはある意味でスターリニストであったとされる。スターリンの伝記を書くにあたって、彼は他の人が接することの出来ないようなアルヒーフに接することが出来た。その中には大統領府の許可を得なければ閲覧できない貴重な「ロシア連邦大統領アルヒーフ」もあったが、これについては、メドヴェージェフが再三にわたって閲覧許可を得ようとしたが得られなかったと述べている。

(注6～)

スターリンの私的文書については、既にトロツキーが1938年に「スターリンが主立った活動家全員について、その評判をおとしめる資料や証拠品を集めておく特別の保管場所を持っていた。」と書いている。また、スターリンが行った数々の粛清、少数民族弾圧などの一部にはベリヤ、マレンコフ、フルシチョフらが関与していた。スターリンが自ら丹念に作成し、あるいは集めた資料が、スターリン亡き後に世に出ることを、これら最高幹部達が極端に恐れたということは十分納得できる。